

明治キリスト教と宗教多元主義の諸問題 ——事例としてのユニテリアン派の活動から (2)

氏 家 法 雄

1 はじめに

本稿は、『東洋学術研究所紀要』(二二、二〇〇六年)の拙稿の続編である。前稿では、明治期日本におけるユニテリアン派の活動を検討するに先立ち、三つの事項を確認した。すなわち、①現在の宗教多元主義に関する議論の整理、②ユニテリアンの思想と歴史、そして、③ユニテリアン派を初めて日本に紹介した矢野文雄の言説の検討がそれぞれである。明六社系の啓蒙知識人たちは、「我のみ正し」とする頑迷な「正統派」キリスト教宣教師たちの姿に辟易としていたが、人心を安定させるためには何らかの宗教や道徳の必要を自覚していた。そこで注目されたのがユニテリアンである。矢野文雄の言説を振り返ってみると、彼ら啓蒙知識人たちが、科学や学芸と矛盾することなく、諸宗教間の調和を唱えるユニテリアン派をいかに待望したのか理解できる。

本稿では、引き続き、来日後のユニテリアン派の活動を検討する。構成としては次の通りである。

1. はじめに
2. ユニテリアン派の活動——ナツプ来日
3. 『ゆにてりあん』から『宗教』へ
4. 運動としてのユニテリアニズム
5. ユニテリアンはキリスト教か——宗教研究への専心
6. 佐治実然と岸本能武太のユニテリアニズム
7. 宗教多元主義とユニテリアニズム
8. 結論

なお、紙幅の都合から、今回は、「1. はじめに」から「4. ユニテリアンはキリスト教か——宗教研究への専心」部分までを収載する。本稿では、主として来日後のユニテリアン派の活動の検討がその対象となる。なお、次号では、ユニテリアン派の活動をふまえた上で、ユニテリアニズムを受容した二人の象徴的な人物、佐治実然と岸本能武太の足跡をたどりながら、最後に宗教多元主義の問題としてこれを論じていく予定である。

2 ユニテリアン派の活動——ナツプ来日

ナツプ来日

アメリカのユニテリアン協会 (The American Unitarian Association) の宣教師アーサー・メイ・ナツプ (Arthur May Knapp) の日本派遣は、一八八七年 (明治二〇) の九月に決定された¹⁾。このナツプ派遣の背景と、日本での受け入れ体制に関しては、まず福澤諭吉の意向が大きく反映している点を確認しておきたい。前述したとおり矢野文雄の言説から、ユ

ニテリアニズムの来日が明治期の啓蒙思想家たちに待望されたことを紹介したが、福澤諭吉もその一人であり、現実
にユニテリアン派の人々と深く関わってくることになる。かねがねキリスト教を受け入れるべきと言ったものの正統
派宣教師たちの頑迷な態度や布教方法に困却を感じていた福澤諭吉にとって、寛容なユニテリアン派は好ましい宗教
に思われたようであるからだ。

さて、福澤は、その息子の一太郎と捨次郎を、一八八二年（明治一五）よりアメリカに学ばせていたが、実は一太
郎が留学中、偶然ボストンでナツプに出会い、二人の交流が始まった。その一太郎に宛てた福澤の手紙（一八八七年
（明治二〇）一〇月三日付）には、次のような一節がある。

今度ユニテリアンの僧にてナツプと申人日本へ参候に付、其出発前、日本の言語風俗を取調度に付、貴様が其家へ
参るべきよし。是れは面白き事なり。何卒相談の出来候様致度所祈候。現今日本に在る宣教師等も、其布教の方法に
は殆んど困却致し居候よし。是れまでも随分本国の金をば費したることならんなれども、其金丈けの功能はなき様に
相見へ候^③

偶然の出会いから一太郎はナツプの家に寄宿するようになるが、ナツプの方ではこの機会を利用して一太郎から日
本の事情を聞いたり、一太郎の方でも積極的に日本伝道を後押しする形で、来日後の住居の世話や布教上の便宜など、
具体的な援助の手をさしのべたのである。^④

このナツプの日本に向かう送別会が、一月六日、ボストン第二教会で開催された。ナツプ自身の演説のほか、こ
こでは一太郎の弟・福澤捨次郎の演説もなされた。演説の要旨は、『時事新報』に掲載された、『ボストン新聞』記事
の訳文からうかがい知ることが出来る。^⑤

ナツプはこの演説で、来日の目的として「我宗教は実に真理なり汝の宗教は誤謬なり」と言うためではなく、「人を引入る、が為にあらずして唯其人と協議するが為め」に行くものであることを明言している。この「協議するが為」に関しては改めて述べるが、このあり方がユニテリアン派の日本伝道における基本的態度となるものであった。

ナツプの来日は、一八八七年（明治二〇）一月二十二日である。

遠島欽二は、「総ての宣教師は押しかけてきたのであるが、ユニテリアン宣教師だけは招かれて来た」と述べているが、福澤はナツプ夫妻の来日をいたく歓迎し、二人の密接な交遊がここにはじまった。一八九〇年（明治二三）、ナツプが日本を去るときは、その離日にあたり自宅で送別会も開催している⁷。

福澤の宗教に対する考え方は、どちらかといえば冷淡であったが、ユニテリアン派に対する期待はきわめて大きかった。その期待とは、功利主義的宗教観といってもよかろうが、一八九〇年（明治二三）三月に創刊された雑誌『ゆにてりあん』に寄せた、福澤の「ユニテリアン雑誌に寄す」が、その参考になる。福澤はその小文で、自分がいまだ仏教もキリスト教も信仰してはいないが、宗教の必要性については高く評価しているものであることをのべ、次のように言っている。

〔ユニテリアニズムとは——筆者註〕其果して宗教なると然らざるとは余が関せざる所なれども、教の目的は人類の位を高尚にして、智力の働きを自由にし、博愛を主とし、一個人一家族の關係に至るまでも、之を網羅して善に向はしむるにありとることなれば、都て是れ現在の人事にして、余輩宗教不案内の者にも甚だ解し易く、果して其実効を奏せんには、人間至大の幸福これに過るものあらず、就中一個人一家族の關係を善に進るとは、今日我日本社会の急要にして、速きに至るは近きよりするの諺にちがわず、現在の家を極楽にせんことを偏に希望する処なり⁸。

福澤の言葉からは、ユニテリアン派の、①人類愛・博愛志向、②近代科学との矛盾のなさ（智力の働き）、③一個人の幸福と社会の繁栄をめざす視点、への共感を確認することが出来る。

さて、歓迎したのはいうまでもなく福澤一人ではない。ナップの社交的な性格も幸いし、政府の要人や教育者、ジャーナリスト、例えば加藤弘之、中村正直、増島六一郎、志賀重昂、杉浦重剛、三宅雪嶺らにもナップは歓迎されたのである。また徳川義礼侯爵、佐野常民子爵、黒田長成侯爵ら上流階級の人々も、積極的にナップを支援した。

ナップの説いたユニテリアニズム

では、来日したナップは、ユニテリアンをどのようなものとして日本人に紹介したのであるうか。ナップが、日本で講演もしくは寄稿した初期のものとしては、一八八八年（明治二）四月一日に慶應系の団体・交詢社で講演した「ユニテリアン之教義」⁹と、雑誌『日本人』に、その主筆・志賀重昂の求めに応じて記した「余が日本に來遊せる旨趣を述ぶ」¹⁰の二つがある。

前者では、これまで紹介してきたユニテリアニズムの教えを述べた後、ナップは、ユニテリアニズムが、教派ではなく運動であるという点を強調している。従って自己の信仰を絶対化して他の宗教を、「ヒーズンと云ふが如き侮慢の語」を用いて呼ぶことは決してない。この態度は後者の「余が日本に來遊せる旨趣を述ぶ」において、いっそう明確にうち出されている。ナップはその中で、自分が決して日本人をユニテリアン派に改宗させるために来たのではないことを繰り返し強調している。すなわち、来日は「信徒を得るに非らずして、朋友を博する」ためである。従って、信徒を得るのではなく、「諸般宗を比較的に研究」したり、「諸宗教を早呑込するの精神に非ずして、之を研究し、之と同感を表示」するのが目的であり、諸宗教の比較的研究が、当然その立場から生ずることを言明している。

ナップは来日して三ヶ月後に、アメリカのユニテリアン協会に最初の報告書を送っている。¹¹そこではユニテリアニ

ズムが日本の知識階層から歓迎されていることを伝えるとともに、日本滞在の印象も綴っている。

ナップが、日本に抱いた印象のなかで注目されるのは、当時の日本では、近代西洋文明の伝来とともにキリスト教が伝播したにも関わらず、正統派のキリスト教に対しては、根強い反感があるという事情である。ナップによれば、その反感は、日本人の国民性に由来するというのが、すなわち、①寛容で、②現世主義的で、③奇蹟を認めたがらず、④人間の可能性を信ずる日本人の性格がそれである。こうした国民性に対して①排他的で、②超俗的で、③奇蹟を信じ、④贖罪を説く正統派のキリスト教が歓迎されないのは当然であり、そこに、ユニテリアニズムに期待される面が大きくなることを記している。

現実には日本人にとっては、三位一体が何なのか、とか、「正統」派とユニテリアン派の違いが何なのか、ということとはたしかに大きな問題ではない。キリスト教徒になった者ならともかく、一般の日本人からすれば、等しく異国の宗教である。であるとすれば、これまで正統派キリスト教の好まれなかつた要因を分析し、全く異なる方向を提示せざるを得なくなる。それが先ほど述べたような四点を踏まえた上での対応であり、とりわけそのなかでも、他宗教との関係が強調されてくることなのである。

ナップは、来日の目的を次の三点にまとめている。¹⁰⁾

第一が、日本の知識階層の間での日本の宗教状況を調べること。

第二が、その階層の人々にアメリカの自由思想を知らせること。

第三が、同じ人々に自由思想や近代科学と調和する形態のキリスト教を示して、できるだけ協力をえること。

この三つを言い換えるならば、すなわち、①日本の宗教の調査研究、②ユニテリアニズムの伝達、③諸宗教間の相

互の協力、と表現することができよう。従来、日本で布教にあたっていた正統派のキリスト教には、②の伝達はあつたが、①の調査や、③の協力の側面はほとんどなかった。そのためにユニテリアン派は正統派との対応上からも、調査と協力の側面を強くうたうようになる。ナップが、来日に際して「人を引入るゝが為にあらずして唯其人と協議するが為め」と語つたように、こうした側面が運動を特徴づけるのである。

3 『ゆにてりあん』から『宗教』へ

ユニテリアン派の活動は、福澤を始め各界名士の後援もあつて、順調に伸展した。一八八九年（明治二二）五月に一時帰国したナップは、日本でのユニテリアンによる宗教運動が有望であることを説き、一〇月に宣教師のマッコレーイ（Clay MacCauley）を伴つて再度来日する。この時は調査目的ではなく、日本でのミッションを開拓するための正式な宣教師としての来日である。翌一八九〇年（明治二三）一月には、英国から宣教師ホークス（H.W.Hawks）を迎え、小教派としては、充実した陣容をもってミッションを開始させた。またナップたちがわざわざ改宗を求めなくても、自らユニテリアンになりたいという日本人が、次々に集まつてきた。二月には麻布飯倉町に惟一館と称されるユニテリアン協会の本部を設置し、三月一日には、その機関誌である『ゆにてりあん』を、マッコレーイを主筆として創刊できるまでに進展する。当時の日本は、条約改正交渉の失敗に由来する排外主義・国粹主義の風潮が一層高まる中であつたが、再来日後およそ半年で本部を設置し、機関誌の発行を發行できるようになつたことはユニテリアン派のよ¹³うな小教派の活動としては順調なスタートであつた。¹⁴

『ゆにてりあん』の刊行

さて、雑誌『ゆにてりあん』のおもて表紙裏には、次のようなユニテリアンの教義が掲げられていた。

ゆにてりあん教根本の主義

- 第一、基礎、此教の基礎とする所は口碑的の憑拠にあらずして道理的と理学的の真理にあり
- 第二、方法、此教の方法とする所は全く討究の自由なるにあり
- 第三、目的、此教の目的とする所は一個人及社会の道徳を最も高尚なる域に発達せしむるにあり

ゆにてりあん教徒普通の説

- 第一、宗教は必ずしも迷信にあらず人類の上帝に対する関係及義務の自然にして若かも必要なる言明なり
- 第二、基督教は其純粹なる教義に於て上帝の天父たることと人類の同胞たることを教ゆる宗教なり
- 第三、上帝は永遠無窮の力と智慧と慈悲とにして自然発達の方法に依りて宇宙を導くものなり
- 第四、人類は発達の最も高尚なる結果なり唯夫高尚なるが故に上帝の子と称するを得るなり
- 第五、經典は人間の著作を集蒐したるものにして誤謬ありと雖とも人類宗教的性質の最良なる言明を含蓄するものなり

第六、基督は宗教的発達に於て人類を導きたる教導者中其最も卓越なるものなり

第七、世界の各宗教は皆交友にして各々長所ありと雖とも尽く同一の本源と同一の目的を有するものなり

また創刊号の内容からも、ユニテリアン派の考え方をうかがい知ることが出来るため、長くなるがその「目次」も確認しておきたい。

社説

発行之趣旨

論説

ユニテリアン教は一の宗教なり

ヘンリー、ダブリュー、ホークス

ユニテリアン教は一の社会力なり

アーサー、メイ、ナツプ

ユニテリアン教は一の道徳力なり

クレイ、マックコーレー

祝詞

ユニテリアン主義なる雑誌の発刊を祝す

加藤弘之

寄書

ユニテリアン雑誌に寄す

福沢諭吉

ナツプ君の雑誌発行につき一言す

中村正直

ユニテリアン雑誌発行に就て

杉浦重剛

言行録

ドクトル、チャンニングの小伝

C. M.

雑報

執筆陣をみてもわかるとおり、ユニテリアニズムは、言うまでもなく明六社系の人々によって歓迎された。両者の間におのずと考え方に共通するところがあつたからである。自然科学、社会科学と調和した宗教の必要性や宗派意

識にとらわれない宗教性による道徳の涵養が両者の共通点である。

雑誌『ゆにてりあん』は、宣教師のほかにも、日本人としては佐治実然、有賀長雄、志賀重昂、金子堅太郎、大内青巒、三宅雄二郎、荒川重秀らが寄稿した。編集の実務にあたったのは荒川重秀であるが、彼は札幌農学校の第一期生であり、クラークによってキリスト教に入信する。ミシガン大学に留学中、ユニテリアンの思想に接したことが縁となり、日本におけるユニテリアン派の運動に協力するようになった人物である。

『ゆにてりあん』から『宗教』へ

この『ゆにてりあん』は、一八九一年（明治二四）一〇月に第二〇号をもって終刊とし、翌一月からは、改めて月刊雑誌として『宗教』が刊行された。¹⁶ここで問題となるのは、なぜ『ゆにてりあん』を『宗教』というタイトルに改めたかということである。『宗教』創刊号のおもて表紙裏には、「主義之宣言」と題して、次の言葉が記されている。長くなるが引用したい。

主義之宣言

宗教は上帝を知覚し自ら神意と信ずる所に従ひ生活の方向を決する所のものなり

「宗教」はユニテリアン弘道会に於て発行し其目的は純正宗教の知識と実践とを明にし之れが改良進歩を計るにあり元来ユニテリアン教は宗教上の一運動にして其本源と歴史とに於て基督教たり然れども「宗教」は決して表題に掲げたる潤大包容の名目に背き一宗一派に偏するものにあらざるなり

ユニテリアン教は基督教の自由及び進歩的發達にして普及倫理、及び普及宗教と異名同義たらしめんと希望を有す故に曰く世界の宗教は千差万別各其形状を異にすと雖ども均しく是を円満なる一大宗教の一面に過ぎざるなりと、

さればユニテリアン教徒は誠実に上帝を尊崇し宗教的智識と生活とを探求するの徒に向つて全情を表し交友たらん事を希望するものなり

日本ユニテリアン教徒は上帝の天父なる事及び人類の同胞なる事を信じ此雜誌を奉じて以て完全なる至真と正道との本領を世界に拡張せんとす

余輩は「ユニテリアン」教の何者たるを一層明瞭にせんが為左に該教徒の根本主義及び其普通信仰を記せん

「主義之宣言」に続く「ユニテリアン教の根本の主義」および「ユニテリアン教徒普通の信仰」は、雑誌『ゆにてりあん』に掲げられた前述のものと、多少の表現が異なるのみで、内容的にはほぼ同一のものである。¹⁷⁾

『ゆにてりあん』の名を『宗教』と改めた理由は、「主義之宣言」にもあらわれているとおり、それによってユニテリアン派の「潤大包容の名目に背き一宗一派に偏するものにあらざる」性格を、いっそう鮮明にせんと主張である。加えてここでもユニテリアン主義が、「元来ユニテリアン教は宗教上の一運動」として強調されている。すでにユニテリアン協会には、仏教徒であった佐治実然も参加していた。佐治は、兵庫県の真宗寺院の息子だが、自然科学を好み、上京して大内青巒の影響を受け、東本願寺からは離れた。荒川重秀が『ゆにてりあん』の編集を辞した後、マッコレーは神田佐一郎を佐治実然のところ遣わし、まもなく開講予定の東京自由神学校の講師を要請した。やがて、ナップとマッコレーと、たがいに語りあううちに、彼らの話す宗教と、自己の到達した宗教観がきわめて類似していることを実感した。それから二年後に、佐治はユニテリアン協会に加入して、その会堂で説教をするほどの幹部の一人になっていた。¹⁸⁾

佐治のような仏教徒をも「包容」するものとして、日本のユニテリアン協会が、キリスト教の一宗派としての枠組みから一歩踏み出ようとしていたことが、その機関誌改名の一因であったと思われる。もつとも、この日本のユニテ

リアン協会が、母国のユニテリアン以上に「包容」性を示したことが、キリスト教の一宗派としてのユニテリアンのアイデンティティを揺るがすことになるのだが、福澤らの保護を受け、正統的キリスト教に対する反動的風潮によって、その運動は順調な展開を続けるのである。

さて、『宗教』への改名という変化は、タイトルだけでなく、その誌面にもおなじような変化が現れている。『宗教』誌上には、「宗教起源論」、「宗教の進化」、「宗教の研究方法に就いて」、「宗教研究の諸方面」といった論説が次々と現れてくる。これらは必ずしもユニテリアン協会の人々の手によるものではなかったが、教会形成の側面よりも、むしろ、宗教研究もしくは宗教間対話の「場」としてのユニテリアン協会の特色が強烈にあらわれている。ユニテリアン協会が発刊した『ゆりてりあん』および『宗教』は一宗派の機関誌というよりも、むしろ宗教雑誌と呼ぶ方がふさわしく、当時の日本においては宗教研究の雑誌としてはその嚆矢となるものである。一宗派の機関誌が、博く宗教という共通項をたよりに、宗派を超えた共同討議の場を設けたことは、この時代において驚異的なことであろう。

東京自由神学校の設立

時を同じくして、日本ユニテリアン協会は、機関誌発行だけでなく神学校の設立にも着手する。ちょうど、『ゆりてりあん』が終了し、『宗教』へと改名刊行される時期と重なるが、一八九一年（明治二四）一〇月、加賀町の館内に東京自由神学校を発足させるのである。

「神学及び宗教の科学的研究を奨励し、而して其結果を以て、人生の實際に応用せん」¹⁹ことを目的に掲げた東京自由神学校では、宗教の自由討究や比較研究が奨励され、修業年限は三年と定められた。学生は七人で、教授陣にマッコレーイやロレンスのほか、ナツプが福澤諭吉に斡旋した慶應の三人の外国人教授、それに金森通倫が担当した。

一〇月一五日、神学校の開校式では、校長に就任したマッコレーイは次のように演説している。

東京自由神学校は、将来神学を以て、科学の一科として研究するの処の、一大神学校と為さん事を冀望するものにして、決して、一宗派、一門流に偏執するものに非ず、反て総ての科学と調和し得る処の、神学を教授するものなり²⁰⁾

この自由神学校でも、ナップが強調し、機関誌が『ゆにてりあん』から『宗教』への改名の原因となった、「一宗派、一門流に偏執」しないユニテリアンの精神が標榜されている。一八九一年（明治二四）秋から開講された初年度には、次のようなカリキュラムと教授陣で講義が行われた。²¹⁾

哲学的、並に歴史的の神学	教授	クレイ、マッコレー
經典批評、並ニ經典講義	教授	ウイリアムス、アイ、ローレンス
社交的倫理学	講師	ガレット、ドラッパアーズ
基督教歴史	講師	ダブルユー、エス、リスカム
倫理学の原理	講師	ジョン、エッチ、ウイグモア
説教学	講師	金森通倫

カリキュラムではもちろん、「基督教歴史」、「説教学」が教授されたが、そのほかの「經典批評」とか「倫理学」など、近代の科学や学問を意識した科目が比較的多くあり、正統派キリスト教の神学校とは著しい対比をなしている。²²⁾

翌一八九二年（明治二五）度からは、教授陣に、金森通倫に代わって大西祝と佐治実然が入っている。²²⁾ 初年度開講されなかった「比較宗教学」に相当する科目として「東洋諸宗教学」を佐治実然が担当し、「倫理学」「哲学」を大西

祝が担当した。後の一八九三年（明治二六）、名称を先進学院に変更した。

4 運動としてのユニテリアニズム

運動としてのユニテリアン主義

機関誌の発刊、教育機関の設置と多彩に運動を展開した日本ユニテリアン協会は、一八九四年（明治二七）三月、手狭になった京橋区加賀町の本部を、芝区三田四国町に移転する。当地で、惟一館（現在の友愛会館）を建設し、活動の拠点とした。惟一館はニコライ堂や鹿鳴館建築で名高いジョサイア・コンドルが設計した和洋折衷、木造二階建ての建物だが、一九二三年（大正二二）、大正大震災によって組織が解散するまでユニテリアン派の中核として機能した。さて、ナップは一回目の来日を「調査」と「対話」(messenger)²³、二回目の活動を「宣教活動」(mission)²⁴と位置づけ、マッコレーイと共にユニテリアン派の活動を展開したが、二人が強調したのは、前述したとおり、運動としての側面、すなわち、ユニテリアン教をリベラリズムの運動として紹介した点である。

ユニテリアン主義は自由主義の運動である——この主張によって日本の知識人の間でユニテリアン派が歓迎された。福澤諭吉ら明六社系の知識人たちがユニテリアン派に賛同したのもまさにこの点であるが、このことは極端に言えば、運動であるがゆえに、特定の宗派に所属する必要はまったくない。ナップは、宗教としての組織作り（＝教会形成）を二の次に考えたふしがあり、特定の伝統に固執した道徳や宗教を超えた、ひとつの運動であるとたえず宣伝している。またこうした立場から、来日の目的が諸宗教の比較研究による相互理解であるとか、教義をさらに発展させる等々——宣教活動よりも調査や研究が重視されたわけだが、それは必然であろう。

ナップは、特定の宗教伝統を日本に輸出したり、日本固有の特性を廃棄したりするのではなく、科学的な知の発達によって、日本独自の進化を促すことを主張したのである。運動には、キリスト教信徒やユニテリアン信徒になった

者だけでなく、佐治実然や中西牛郎などの仏教徒も含めるかたちで「知的サークル」として進展するのである。

ちなみに、日本ユニテリアン協会の教会（チャーチ）組織である「日本ゆにてりあん弘道会」の設立の主意のなかでも、ユニテリアニズムを宗教運動と捉えている。長くなるが引用したい。

抑も教会設立部の主意とする処は、近世に於て最も発達したる、哲学、科学の上に基礎を置き、以て神人の関係、人心の意向、行為を整理改良せしむるにあり、約言すれば、合理的宗教の研究並に其實行を奨励し、以て心靈の開發伸張を図るに在るなり、之れか為に「ユニテリアン」教徒は頗る寛容の意見を抱き、古今東西の諸宗教を交友として歓迎し、漫りに他教を貶せず、排せず、凡そ真理の存する処生命の存す処には、喜んで腕臂を延はし、之れを追求して止まざるなり、今や欧米に於て光輝最も燦爛たる「キリスト」教は幾多の時代、幾多の変遷を経、改倭切磋の功を積で、漸く今日の形状となりたるを知る、東洋の儒仏二教豈又獨り然らざらんや、其民に接し其国に入り、諸の時代諸の変遷を経過せば、或は其状彼の欧米に於ける「キリスト」教の如くならざるを期すへからず、それ然り、「キリスト」教も亦近年東洋に渡来してより以来、未だ幾許ならずして、其思想に変遷の徴候を見るは実に著しきものなり、元來東洋には東洋固有の思想あり、「キリスト」教が此の思想に觸れて今一層の開發を促さすと云を得んや、茲に於て「ユニテリアン」教徒は如此宗教的運動の起らん事を企望するものなり、総へての宗教をして、あらゆる時代に觸れ、あらゆる思想に觸れしめ、以て心靈的最上の開發進歩を計らんとするなり、只た恐る其間諸の迷妄加はり謬説行はるゝに及んては、却て万功を一実(25)に欺く事を、故に彼のチャンニング氏が云はれし如く「人間最上の制裁力たる道理に憑拠し、鋭利なる批評学に由り、普く真理を闡發して、人生の指碇を定めん」とするなり、已に此の主義を以て立つ、彼の專断なる教權に依る者とは勢ひ戦はざるを得ず、迷雾妄信の巷に彷徨ふ者には之れを開いて其光輝を仰かしめざるを得ざるなり

たしかにユニテリアニズムとは、「哲学、科学の上に基礎を置き」、「専断なる教権に依」らない自由の運動である。「頗る寛容の意見を抱き、古今東西の諸宗教を交友として歓迎し、漫りに他教を貶せず、排せず、凡そ真理の存する処生命の存す処には、喜んで腕臂を延はし、之れを追求して止まざる」リベラリズムの運動としての側面は、宗教間の対立・衝突・闘争といった状況を眼前した場合、そうした状況を調停する必要不可欠の視座である。しかし、この側面のみ推し進めてしまうと、現実の宗派として、また教会としてのユニテリアン派の拡大・発展にとっては妨げになつてしまう。

もちろん、このことは日本におけるユニテリアン派に限られた現象ではない。教派の伝統を大切にしながら組織の発展を目指す方向と自由への衝動という方向、この二つの方向性の対立と拮抗は、常にユニテリアンの歴史に見られるものであった。教会という枠を飛び出し、自由が優勢の時は、社会的影響力は強まるものの、組織としては弱体化してしまふ。またその逆に組織として強まると、教会形成に専念するあまり、社会的影響力という観点からは、停滞してしまふ傾向となつてしまふ。このことは日本におけるユニテリアン派の活動に関しても例外ではなかつたといえよう。

「キリスト」教も亦近年東洋に渡来してより以来、未だ幾許ならずして、其思想に変遷の徴候を見るは実に著しきものなり、元來東洋には東洋固有の思想あり、「キリスト」教が此の思想に触れて今一層の開發を促さすと云を得んや、茲に於て「ユニテリアン」教徒は如此宗教的運動の起らん事を企望するものなり、総へての宗教をして、あらゆる時代に触れ、あらゆる思想に触れしめ、以て心靈的最上の開發進歩を計らんとする」ものであれば、当然のことながら、ユニテリアン主義を受け容れることが、即ユニテリアンという団体に所屬すること、信徒となることも意味しない。

例えば、ナップが慶応義塾に紹介した三人の米国人教授も、マッコレーイからも「実質上ユニテリアン」と言われたが、実際にはユニテリアン教徒ではなかった。⁽²⁶⁾

雑誌『日本人』の「ナップ氏の国粹論」と題した論の中で、ナップはある日本人女性の「父を去て耶蘇に帰するを得ない」という話を取り上げ、ナップは「余も亦父を離れずと云はん」と述べ、改宗の必要なし、と答えている。⁽²⁷⁾ こうしたナップの考えは主筆であり保守派の論客である志賀重昂を喜ばせたのは言うまでもない。

宗教儀礼に関しても「洗礼式とロードサッパー式の如きに至りては、吾人ユニテリアン教徒の認めて以て必要とせざる所なり」⁽²⁸⁾と断言し、簡素な礼拝のみ実施した。礼拝では、『聖書』は使用されず、『礼拝提要』が用いられた。ナップによると「宗教書類中其最良なるもの」⁽²⁹⁾を集めたのが『礼拝提要』であり、「独り基督教の經典のみならず、東洋の有ゆる神聖なる書中より其最良なるものを抜粹せるもの」した聖典アンソロジーである。そこに収録されたのは「孔子、老子、釈迦等の書類に於て宗教的精神の尤も高尚なる格言、モハメット教の抜粹、印度本源の抜書等総て其中に在」るもので、惟一館は万教一致の象徴とされたが、日本ユニテリアン協会はキリスト教としてのアイデンティティをもちながらも、その枠組みを超え出そうとするラディカルな側面をもっていたことがわかる。

たしかにユニテリアン派の宗派を問題にしない姿勢が、ユニテリアン主義者の一つの特徴ではあるが、こうした状況では、キリスト教の一派としてのユニテリアン信徒が育成されたり、信徒数が増えるはずがない。たしかにユニテリアン派に人々は集まったが、信仰者として教会（ゆにてりあん弘道会）にとどまった人物はわずかである。

宗教倶楽部

ユニテリアン派のこうしたジレンマを揶揄した人物の一人がアナキストの幸徳秋水である。彼は『日刊平民新聞』で「佐治、平井、神田、岸本、豊崎の諸氏、皆仏教若しくは基督教より転ずるユニテリアン会員」⁽³⁰⁾とそのあり様を批

判した。安部磯雄は、同新聞の第五四号の中で、幸徳に次のような反論を加えている。

ユニテリアンを以て基督教徒と別物の如く見るは如何と存じ候。元来ユニテリアンは宗教倶楽部と見るべきものに於て教会にはあらず候。小生は明治二十二年以来岡山基督教会に籍を置くものにて今日も其通りに御座候。³¹

安部の反論は、ユニテリアニズムとは教会ではなく、協会（＝「宗教倶楽部」）であり、ユニテリアンであることと、キリスト教徒であることは両立可能との主張である。

ここで考えなければならないのは、安部のいう「宗教倶楽部」のことである。すなわち、「協会」(association)と「教会」(church)の問題である。元来、アソシエーションの協会とは、複数のチャーチがあつて成り立つはずのものである。しかし当時のユニテリアン派は、どちらかといえば、チャーチの形成が疎かになっていた。そのため、安部のような「ユニテリアンは教会にはあらず」という発想が出てくるのである。

確かに日本ユニテリアン協会は、「ゆにてりあん弘道会」という教会組織を形成したが、現実には、教会を統合する協会としての側面・運動が強調され、宗派としての宗教活動がおろそかになった点は否めない。また木下と安部のやりとりからもわかるように、当時のユニテリアンはキリスト教の一宗派といよりも、キリスト教に限られない複数の宗教の信仰者を統合する一つのクラブのようなものと見做されていたのである。

いずれにせよユニテリアン協会は「至善界を發達の理想となし、科学的知識に基き、各人をして自由に討究せしめて、日本国民の發達を計るを以て目的となすもの」³²であった。これによつて日本のユニテリアン協会は、その後安部磯雄をはじめとして日本の社会主義運動や鈴木文治の「友愛会」など、社会活動を積極的に展開することになった。一八九八年（明治三一）からは、『六合雜誌』を『宗教』と合併させて、それを機関誌化し、論壇にも重要な一翼を占

めるようになる。

その後一九一一年（明治四四）、内ヶ崎作三郎が日本ユニテリアン協会の牧師に就任すると、その名を統一基督教会と改名した。日本ゆにてりあん弘道会も統一基督教弘道会と改称されたのである。この期になって、再びキリスト教の一宗派としての自覚に立ち戻り、教会活動を重視していく。

5 ユニテリアンはキリスト教か——宗教研究への専心

先にユニテリアン派が自派の活動を、リベラリズムの運動として強調した点を確認したが、宗派意識にとらわれず、有象無象の様々な宗教人が集ってくると、当然、ユニテリアンのキリスト教としての側面が曖昧になってしまう。本部として用いられた惟一館は万教一致の象徴とされ、礼拝では経典アンソロジーが使用される。もちろん、ここではキリスト教を中心とする万教一致が当然視されたが、現実にはそうはいかなかった。「ユニテリアンはキリスト教か」との疑問が投げかけられるようになってくるのも当然である。機関紙『宗教』においても、たびたび「ユニテリアンは基督教なるか」といった議論が交わされ、内部からも反省が強いられるようになる。そのような反省がなされると、今度はユニテリアン協会内の仏教徒たちは、その立場がなくなる。それを象徴する事件の一つが、一八九五年（明治二八）に起こった仏教徒・中西牛郎の脱会宣言であった。

中西牛郎の脱会

中西牛郎は、一八九五年（明治二八）二月三日付で脱会の辞表を出し、その理由を、同年三月の『宗教』に、「マツコレー君に与へてユ教に関する疑義を質する書」として公表した。中西はもともと、仏教の優越性を確信してユニテリアンに加入した人物である。³³中西によれば、ユニテリアニズムは、伝統的な正統派のキリスト教よりも「一層広潤、

一層自由なる基礎の上に立て、現在及び将来の進歩に適すべき一統宗教を建設³⁴するところにその特質を認め、評価していた。ゆえに仏教徒であることも矛盾なく両立するものとみてユニテリアン協会に入会した。ところが、どうも実状はそうではない。ユニテリアン派が正統派のキリスト教の、進歩の途上における一つの状態にすぎないように思われてきた。それでは仏教徒としてはついていけないので、脱会せざるを得ないというわけである。

中西の疑義に対して、マッコレーイは、次のように回答している。すなわち、ユニテリアンの宗教運動の根本は「第一は宗教上の問題に対する自由の討究第二は宗教々理の真偽を判別するに一に人類の理性に拠るべきこと第三は人類の価値を証すべきものとして教会若しくは同働教友が終局の基礎として力を道義の上に致すべきこと³⁵」にある。それゆえ「仏教徒にして人類を正義慈愛の法則の下に導き誠力を之が改善に致さんとするものあらば、彼は真個ユニテリアン教徒の教友として同働することを得べし³⁶」とマッコレーイは答えている。すなわち、仏教徒でも構わないのであるが、それは厳密にいうならば「ユニテリアン教徒」ではなく、その「教友」である。これにより、中西は、それまで勤めていたユニテリアン協会の先進学院における講義こそ継続するものの、雑誌『宗教』の編集の任などは辞退した。

ユニバーサリストからの批判

なお、このマッコレーイの回答を読んだ、同じ自由キリスト教の一派・ユニバーサリストの機関誌『宇宙神教』の記者は、「ユニテリアニズムは宗教と言はんよりは宗教研究の一方法と言ふべきものたるや明白なり³⁷」と批判している。「神人の関係」を顧みないユニテリアニズムの主張に従えば、無神論者でもユニテリアンになれるのではないかと記している。この記事は「彼我異同の弁」とのタイトルがつけられているが、その表題どおり、ユニテリアンとユニバーサリストは似てはいるけれど、「神人の関係」の温度差に大きく違ふところをみようとしている。

もつとも、ユニテリアン派を「宗教と言はんよりは宗教研究の一方法」とみなすユニバーサリストの批判に対しては、マッコレーは応えている。すなわち、運動としてのユニテリアニズムと組織としてのユニテリアン協会とをたて分けた考えである。それは「宗教研究の方法たるユニテリアニズムと、此の方式により得たる結果即ち合理的信念を基礎として社会に運動せんとする団体、即ち日本ユニテリアン協会とは自ら別物」⁽³⁸⁾である、との言い方である。しかし、この両者を分けるのは、かなり難しいことである。

それでも、マッコレーが、次のように言うことだけは理解できる。「ユニテリアンは悉く宗教専攻の学者の如く単に諸宗教を研究して自然の法則を発見せんことを以て目的となすにあらず、合理的信念を得んが為の手段として此を研究するに過ぎず」⁽³⁹⁾。ここに、価値中立的に眺める・観察する・記述する、いわゆる宗教研究者と、ユニテリアンとの相違がうち出されている。これがユニテリアンの宗教研究の性格を示すものである。

自由に宗教を探究する人はみなユニテリアン

中西の騒動を経て、マッコレーは、ユニテリアン協会をキリスト教の一形態、ユニテリアニズムを宗教研究の方向と位置づけるが、その後、ユニテリアン派はキリスト教そのものを超越する方向へふたたびラディカル化する。

ユニテリアニズムでふ名辞を以て一括せられたる方式により得たる信念を有する人これをユニテリアンと称するなり。而して其信念に至りては如何に相違する所あるも決して之に干渉することなし。⁽⁴⁰⁾

これは、前述したユニバーサリストからの批判に対しマッコレーが応答した翌月の『宗教』の社説の言葉である。すなわち、自由に科学的に宗教を探究する人はみなユニテリアンであるとの主張である。ここでは、無神論といえど

も仏教のような形態もあるから、一概に否定できないとし、有神論、無神論の違いも超えていこうとする主張が盛り込まれている。¹¹⁾「ユニテリアンはキリスト教か」——「反省を含めながら、ユニテリアンは常に、こうしたアイデンティティの揺れを経験するが、非キリスト教化への動きは加速する。その一つの頂点が、仏教徒・佐治実然の会長就任である。佐治の日本ユニテリアン協会会長への就任は、マッコレーイ帰国後の一九〇〇年（明治三三）だが、翌年、幸徳秋水とのやりとりの中で、安部磯雄の「宗教倶楽部」との自己規定の発言が出てくるように、この段階になると日本のユニテリアン派がもはやキリスト教とか仏教とかいった宗教の違いを超えたことを世にアピールする結果となった。

佐治が会長の時代、更に宗教の客観的討究や比較研究が求められるようになった。ここでは、もはやキリスト教とか仏教徒かそういった議論を超え、あたかもユニテリアン派の運動は、学者中心の研究者集団の様相を呈してきているのである。

【註】

- (1) 『日本ゆにてりあん弘道会年報』明治二五年、二頁。
- (2) 清岡暎一編集・翻訳『慶應義塾大学の誕生―ハーバード大学よりの新資料』（慶應義塾、一九八三年）、和文一〇頁、英文 pp.11.
- (3) 『福沢諭吉全集』一八、岩波書店、一九六二年、一七二頁。明治二〇年一〇月一三日付福沢一太郎宛書簡。同年十一月九日付書簡でも「過般はナツプ氏方へ二週日計滞留、日本の事情言語の事共話し、同家内君も至て深切なるよし、何れ近々日本へ参候上は面会可致、又日本語教師を本塾より云々の義も、い才承〔知〕致候」とある。
- (4) 会田倉吉「宣教師ナツプと福沢諭吉」、『史学』第二七卷2、3号、一九五四年、二〇六頁。明治二〇年一月九日付福沢一

- 太郎宛書簡（『福沢諭吉全集』一八、岩波書店、一九六二年、一七六頁）でも「過般はナツプ氏方へ二週日計滞留、日本の事情言語の事共話し、同家内君も至て深切なるよし、何れ近々日本へ参候上は面会可致、又日本語教師を本塾より云々の義も、い才承（知）致候」とある。これから見ても福沢一太郎がナツプの家に外向いて、二週間ほど滞在し、日本の事情を教えたり、福沢諭吉も来日の後の世話を考えていたことがよくわかる。
- (5) 『時事新報』一八八七年二月一六日。Russel E.Miller, *The Larger Hope: The Second Century of the Universalist Church in America 1870-1970*. Boston: Unitarian Universalist Association, 1985, pp.420. 送別会における福澤捨次郎の演説はリベラなキリスト教徒にかなりの影響を与えたようである。
- (6) 遠島欽二『人生の苦悩を脱する力』中央出版社、大正一四年、一六頁。
- (7) 『福沢諭吉全集』第一八巻、五〇〇頁。明治二三年一月一日付福沢捨次郎宛書簡。なお送別会の開かれた日は一月一日である。
- (8) 福澤諭吉「ユニテリアン雑誌に寄す」、『ゆにてりあん』一、一八九〇年三月、一九―二二頁。
- (9) ナツプ「ユニテリアン之教義」は一八八八年五月二三日の『時事新報』に掲載されたほか、『交詢雑誌』二九四（一八八八年五月一八日）に掲載され、のちにパンフレットとなり多数印刷配布された。
- (10) ナツプ「余が日本に來遊せる旨趣を述べ」、『日本人』四、一八八八年五月五日。これもある会合でなされた演説要旨である。
- (11) *Sixty-third Anniversary of the American Unitarian Association with the Annal Report of the Board of Directors*. Boston, American Unitarian Association, 1888, pp.31-36.
- (12) *Ibid.*
- (13) ユニテリアンのミッシオン開始は、順調なスタートであったが、時を同じくして有力な支援者がユニテリアンの活動から手をひくようになってしまう。中村正直は一八九一年（明治二四）に亡くなり、精力的にユニテリアンを支援していた徳川義礼侯爵も支援グループから離脱する。また拝外主義と反キリスト教の風潮から金子堅太郎や矢野文雄もミッシオンと距離をおくようになってしまう。さらに病氣のためナツプが一八九〇年（明治二三）帰国する。社交的なナツプの帰国は、彼の人が柄がユニテリアン派の明るいイメージ作りに大いに貢献していただけに、ミッシオンにとって大きな痛手となる。
- (14) (11)（同）, pp.65.
- (15) 蛭名賢造『札幌農学校・クラークとその弟子達』図書出版社、一九八〇年。大島正健『クラーク先生とその弟子たち』新地書房、一九九一年。

(16) (11) に同じ、pp.65.

(17) 参考までに、『宗教』創刊号（一八九一年（明治二四）一月）の「目次」も次に掲げることとする。

社説

天下ノ宗教ハ皆交友ナリ

論林

自由神学及ビ自由思想

ウキリアム、アイ、ローレンス

説教ト演舌

金森通倫

道ハ一ナリ

神田佐一郎

宗教トハ何ゾヤ

丸山通一

一大迷信打破セザルベカラス

平井貞一郎

流俗宗教

高田太郎

伝記

ゼームス、ラッセル、ローウエル氏ノ伝

祝辞

宗教の発刊ヲ祝ス

高田早苗

叢談

余輩ハ何故ニ一神信者ナル？、有神論ノ価値、玄妙、「宗教」ヲ饒ス、其他

雑録

冷々語叢、基督教新聞福音新報ト自由基督教、仏教徒ノ奮発、其他

雑誌『宗教』の頁数も、創刊号はちょうど五〇頁である。

(18) *The Unitarian Movement in Japan, Sketches of the Lives and Religions Work of Ten Representative Japanese*, 1900年、
日本ゆにたりあん協会、同書のなかの、*Sketch of the Life of Jitsunen Saji*, pp.16-22.

(19) (1) に同じ、七一頁。

- (20) 右に同じ、七〇頁。
- (21) 右に同じ、七六頁。
- (22) 『日本ゆにてりあん弘道会第二回年報』明治二六年、五八―五九頁、六二頁。
- (23) Knappは来日の目的について次のように述べている。The errand of Unitarianism in Japan is based upon the now familiar idea of the 'sympathy of religions'. With the conviction that we are messengers of distinctive and valuable truths which have not here been emphasized and that in return there is much in your faith and life which to our harm we have not emphasized receive us not as theological propagandists but as messengers of the new gospel of human brotherhood in the religious life of mankind. (*The Unitarian Movement in Japan, Sketches of the Lives and Religious Work of Ten Representative Japanese Unitarians*, 日本ゆにてりあん弘道会、一九〇〇年、五頁。)
- (24) (11) に同く、pp.65-66.
- (25) (1) に同じ、三八―四〇頁。
- (26) 文学部の教授リスカムはバプテスト派、理財学のドロップバーズはオランダ改革派、法学のウイグモアは監督派に所属していた。宗教的にリベラルであることとユニテリアン協会のメンバーになることは微妙に異なることを物語っている。
- (27) 『日本人』二二二号、明治二二年二月、二二―二三頁。
- (28) アーサー・メイ・ナップ、『ゆにてりあん教の体制』、『ゆにてりあん』第二号、明治三三年、一三頁。
- (29) 『宗教』第七号、明治二五年五月、十五頁。
- (30) 『日刊平民新聞』第五二二号(明治三四年三月一九日)。
- (31) 『日刊平民新聞』第五四号(明治三四年三月二一日)。
- (32) マッコレーイ「日本ユニテリアン協会の目的を論じて世人の誤解を正す」、『宗教』第四四号、明治二八年六月、三二八―三二九頁。
- (33) 星野靖二「中西牛郎の宗教論」、『思想史研究』2、日本思想史・思想論研究会、二〇〇二年、九三頁。
- (34) 中西牛郎「マッコレーイ君に与へてユ教に関する疑義を質する書」、『宗教』第四一號、明治二八年三月、一七六頁。
- (35) マッコレーイ「答中西牛郎君書」、『宗教』第四一號、明治二八年三月、一七七頁。
- (36) 右に同じ、一七六―一八〇頁。
- (37) 「彼我異同の弁」、『宇宙神教』四の九、一八九五年五月、二四二頁。

- (38) マッコレーイ「日本ユニテリアン協会の目的を論じて世人の誤解を正す」、『宗教』第四四号、明治二八年六月、三二〇頁。
- (39) 右に同じ、三二二頁。
- (40) 右に同じ、巻頭の社説。
- (41) この発言はユニバーサリスト宣教師レヴィットを驚かせた。同じ自由キリスト教の仲間と考えていたレヴィットからすれば、社説の発言は自由キリスト教の一線を越えた発言だからである。

(うじけ のりお・委嘱研究員)

Liberal Religious Reformation in Japan : A Study of Pluralistic Theology in the Unitarian Movement during the Meiji Era (2)

Norio Ujike

In this paper, I focus on the Unitarian movement during Japan's Meiji Era, and attempt to examine Unitarian thought and methods of their pluralistic theology. Both positive and negative aspects of the Unitarian Mission are discussed in detail. This study hopes to clarify religious pluralism.